

平成 30 年 5 月 31 日現在

機関番号：12701

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2017

課題番号：16K12992

研究課題名(和文) 学校体育への障害者スポーツ導入によるインクルーシブ教育の推進

研究課題名(英文) Promotion of inclusion via para-sports programs in physical education

研究代表者

海老原 修 (Ebihara, Osamu)

横浜国立大学・教育人間科学部・教授

研究者番号：50185138

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：平成28年度研究は、パラリンピアンへのスポーツ・キャリアにおける学校体育の影響を検討し、障害者スポーツの高度化と大衆化の基盤となる社会資本・学校体育が未整備であり、障害児と健常児が協働するリバース・インテグレーションの理念を体育で実践する必要性を確認した。その上で、平成29年度研究では、体育授業へ障害者スポーツを導入・評価するとともに、その体験の有無による障害者と障害者スポーツへの態度を比較検討した。同じ社会的環境下にある児童生徒を、障害者スポーツを体験した実験群と体験しない統制群に分け、両群の障害者と障害者スポーツへの対応の違いを通じて社会的な態度変容を分析する。

研究成果の概要(英文)：Blind walking & jogging and wheelchair basketball as challenging programs were introduced in two elementary schools and a junior high school. A fixed-alternative questionnaire was conducted to 481 elementary school pupils and 462 junior high school students. This questionnaire was designed two sections. Whereas 14 questions were concerned to handicapped people in the first section, 15 games of Paralympics in second. Each of 29 questions was divided into interest/awareness, willingness, and attitude/behavior in accord with cognitive, emotional and behavioral level. Participants in para sports were significantly higher ratio in interest/awareness to people who wear a hearing aid, attention-deficit/hyperactivity disorder (ADHD), running games with wheelchair, escort person for blind runners, and sitting volleyball than non-participants. Further analyses will be controlling school type, grade, handicapped family member, and level of physical activity.

研究分野：スポーツ科学

キーワード：障害者スポーツ 車いすバスケットボール ブラインドウォーク ブラインドジョギング インクルーシブ教育

1. 研究開始当初の背景

平成 26(2014)年ソチ・パラリンピック大会滑降・スーパー大回転で金メダルを獲得したチェアスキー・狩野亮は同年春の叙勲で紫綬褒章を受ける。そのハイ・パフォーマンスは、父親が地域ではスキー指導員、学校では教師という家庭環境を起点とする生育期の恵まれたスポーツ環境に依拠すると判断できる。なぜならば、同じように受傷した小学 3 年の少年 A がいたならば、と仮定するからだ。受傷前後にスポーツに接する環境にないならば、彼や彼女が身体を動かして心臓をドキドキさせるチャンスはどこにありえたのであろうか、と問いかけたいからだ。教育基本法第 4 条は教育の機会均等を、スポーツ基本法前文はいわゆるスポーツ権をそれぞれ言明する。では、義務教育段階にある少年 A に、小学校・体育や中学校・保健体育においてどのようなかたちの義務教育を用意できたのであろうか。同じく地域社会において運動・スポーツを行いたいと強く要望する身体欠損児にいかなるスポーツ環境を準備できるのか。狩野亮が過ごしたスポーツ環境は偶発的に出来たと省みるべきであり、同じように発症・受傷した同年代の障害者が、その生育過程で教育基本法やスポーツ基本法を遵守する教育・スポーツ環境にいたならば、狩野亮を超えるようなスポーツ選手に成長したかもしれない、と想像すべきである。少年 A に保障すべき教育機会を、われわれは今も昔も備えていない現状を認識しなければならない。

2. 研究の目的

本研究は、教育基本法やスポーツ基本法の理念の下、障害をもつ児童・生徒が健常児とひとしく教育を受ける権利を履行・保障する挑戦的な試論である。起案するパラスポーツは、障害による不可視な区分を可能な限り可視的に取り扱う身体表現をともなう挑戦であり、必要最低限の条件整備となる応戦を超え、多種多様な障害をさらに乗り越える端緒となる、

と期待される。これらの成果を踏まえて、研究期間においては、体育・保健体育の専門領域または「総合的な学習の時間」の教育課程になかにも、地域の特性に応じた障害者スポーツを組み入れる、実現可能な教育課程編成を提案する。

3. 研究の方法

具体的な事業展開として、普通学級に在籍する肢体不自由・身体障害児童・生徒を念頭に、障害者スポーツを小中学校の体育授業に導入するが、そこでは障害児と健常児が主に車椅子バスケットボール、補完的にレーサー仕様車イスにて、体験し、競い、協働する。障害の有無にかかわらず、健常児も分け隔てなく参加するので、先導的・先取的なインクルーシブ教育の実践の可能性を秘める。この試行を特別活動となる運動会の徒競走やリレーに敷衍すると、レーサー仕様車イスの順序を指定し、障害をもつ児童生徒の対抗馬は健常児となり、両人が必死で競い合う光景も描き出せる。国民の大多数が体験している、あの徒競走前の心臓のドキドキを、少なくとも肢体不自由児童生徒が実感するチャレンジとなる。

もちろんすべての教育現場の体育授業に障害者向けスポーツ備品(車イス、スポーツ義足など)を準備する試行は非効率が予測されるので、障害者スポーツを推進する拠点校での体育授業や障害者スポーツ部活動といった、障害者スポーツ推進校といった教育プロジェクト計画を視野に入れる。

本研究では障害者スポーツの体験が障害者への対応という社会的行動に変化をもたらすかを検討する。障害者スポーツへの関与は、同じ環境であっても、従前では気づかず、関心をもたない姿勢がこれやあれやの存在に気づき、積極的にかかわる意欲を喚起せしめ、実際の行動にあらわれる可能性がある。

そこで、同じ環境下にあると期待される、同一の小中学校に在籍する児童生徒を対象に、実験群がブラインド・ウォーキングやジョギング、

ゴールボール、車いすバスケットボールを体験し、統制群がこれらのプログラムを体験しない、もしくは、後日に体験するプロトコルを用意した。

4. 研究成果

さて、挑戦的萌芽研究となる本研究では、障害者スポーツの体験がインクルーシブ教育の推進にいかほどに貢献するかが主眼となる。この目的を達成するには、主眼となるインクルーシブ教育推進の指標となる障害者や障害者スポーツへの社会的行動変容を把握する調査票の作成が第1段階となる。社会的弱者との共生社会構築を目指すポスターや公共広告を手掛かりに独自の調査票を作成した。この制作自体が主題となろうが、この指標の妥当性・信頼性を検証する必要があるのは言うまでもない。

すなわち、インクルーシブ教育に連動する、障害者への対応 14 項目を「見たことがある」(興味・知識・理解)、「手伝おうとしたことがある」(関心・意欲)、「手伝ったことがある」(態度・行動)の3区分のステージを設け、「はい」「いいえ」で回答を求めた(図1参照)。


11. 盲導犬(もうどうけん)を連れている	
	こういう人を…
	1. 見たことがありますか？
	2. 手伝おうと思ったことがありますか？
	3. 手伝ったことがありますか？

図1. 盲導犬を連れている

さらに、障害者スポーツ種目 15 種目を「実際に見たり、テレビやネットで見たりしたことがある」「実際に観戦したり、または、テレビやネットで観戦したい」「やってみたい」「やったことがある」の4区分のステージを設け、「はい」「いいえ」で回答を求めた(図2参照)。

統計分析では、障害者スポーツ体験の有無と 29 項目の「はい」「いいえ」への回答のク

ロス集計に基づきカイ 2 乗検定で、障害者スポーツ体験の影響を検討した。


24. 車いすバスケットボール	
	この種目を
	1. 実際に見たり、テレビやネットで見たりしたことがありますか？
	2. 実際に観戦したい、または、テレビやネットで観戦したいと思いますか？
	3. やってみたいと思いますか？
	4. やったことがありますか？

図2. 車いすバスケットボール

具体的な障害者への対応は、(1)杖を使っている、(2)義足をつけている、(3)義手をつけている、(4)白杖を使っている、(5)車いすを使っている、(6)両腕で杖を使っている、(7)補聴器をつけている、(8)手話を使っている、(9)酸素吸入器をつけている、(10)妊娠マークをつけている、(11)盲導犬を連れている、(12)大きな声を出している、(13)ひとり言をつぶやいている、(14)授業中すわってられない、次いで、障害者スポーツでは、(15)車いすで走っている、(16)義手・義足で走っている、(17)伴走車といっしょに走っている、(18)義手・義足で走り高跳びをしている、(19)ボッチャ、(20)ゴールボール、(21)シッティングバレーボール、(22)ブラインドサッカー、(23)目や耳に障害のある人が水泳をしている(視・聴覚障害者水泳)、(24)車いすバスケットボール、(25)車いすテニス、(26)チェアスキー、(27)専用のストックをつけてスキーをしている、(28)義足をつけてスノーボードをしている、(29)アイススレッジホッケーであった。

対象校は3校で、横須賀市立A小学校の対象児童は4年(34名)、5年(50名)、6年(38名)で、最初に任意の学年がブラインドウォークを体験し、2週間後にすべての児童が調査票に回答した。したがって、体験グループと非体験グループは同じ社会環境下において、ブラインドウォークの違いによる影響を特

定するプロトコールとなる。調査後に、非体験グループもブラインドウォークを学習する手順となる。また、B 中学校ではブラインドウォークならびにブラインドジョギング、横浜市立 C 小学校では車いすバスケットボールをそれぞれ学校体育ならびに総合的学習の時間などを活用して展開した。一方で体験の有無による障害者対応や障害者スポーツへの参与を確保し、他方で児童生徒が等しく体験の機会を獲得するために、開講授業に時間差を設ける措置を準備した。

表 1 では障害者への対応 14 項目をそれぞれ「知識・理解」、「関心・意欲」、「態度・行動」に分けて障害者スポーツ体験の有無別にクロス集計した。体験グループが非体験グループより高い関心を持つ項目は「7.補聴器をつけている」の知識・理解、「12.大声を出している」の態度・行動、「14.授業中に座ってられない」の知識・理解、関心・意欲、態度・行動の 5 項目であった。

これに対して、非体験グループが体験グループを上回る項目は「1.片手で杖を使っている」の関心・意欲、態度・行動、「2.義足をつけている」の関心・意欲、「4.白状を使っている」の関心・意欲、「5.車いすを使っている」の関心・意欲、態度・行動、「6.両腕で杖を使っている」の関心・意欲、態度・行動の 8 項目を数える。

表 1. パラスポーツ体験にともなう障害者への社会的行動変容比較

		1.あり (n = 407)	2.なし (n = 527)	カイ 2 乗値
1	知識・理解	94.1	92.2	1.257
	関心・意欲	51.0	61.2	9.707**
	態度・行動	18.5	26.0	7.392**
2	知識・理解	45.1	40.4	2.035
	関心・意欲	19.9	27.9	7.967**
	態度・行動	4.2	3.8	0.071
3	知識・理解	14.5	10.6	3.263

	関心・意欲	13.1	17.4	3.283
	態度・行動	1.5	1.9	0.253
4	知識・理解	80.3	83.7	1.785
	関心・意欲	51.0	61.1	9.493**
	態度・行動	17.2	21.4	2.624
5	知識・理解	99.3	99.2	0.001
	関心・意欲	57.2	63.6	3.916*
	態度・行動	25.0	32.1	5.548*
6	知識・理解	73.0	76.3	1.292
	関心・意欲	43.1	52.8	8.591**
	態度・行動	17.8	23.7	4.738*
7	知識・理解	71.9	65.2	4.841*
	関心・意欲	33.7	30.7	0.898
	態度・行動	18.8	15.6	1.671
8	知識・理解	51.7	48.1	1.201
	関心・意欲	18.2	22.3	2.358
	態度・行動	5.4	6.3	0.307
9	知識・理解	39.0	37.5	0.208
	関心・意欲	19.5	19.6	0.001
	態度・行動	6.7	5.1	0.970
10	知識・理解	80.3	82.1	0.479
	関心・意欲	55.4	61.0	2.930
	態度・行動	36.8	41.9	2.457
11	知識・理解	60.7	60.4	0.012
	関心・意欲	29.8	33.7	1.626
	態度・行動	7.2	8.7	0.709
12	知識・理解	87.7	84.1	2.376
	関心・意欲	50.2	47.1	0.932
	態度・行動	44.3	37.9	3.964*
13	知識・理解	81.7	80.6	0.202
	関心・意欲	47.9	47.1	0.063
	態度・行動	40.6	39.4	0.129
14	知識・理解	55.2	38.1	27.083**
	関心・意欲	39.0	25.4	19.729**
	態度・行動	36.1	21.4	24.774**

有意水準：0.05：*、0.01**

表 2 では障害者スポーツへの対応 15 項目をそれぞれ「知識・理解」、「関心・意欲」(観

戦や視聴)、「関心・意欲」(実際の体験)、「態度・行動」に分けて障害者スポーツ体験の有無別にクロス集計した。

この分析で留意すべき点は、ブラインドウォークやブラインドジョギング、車いすバスケットボールの経験の有無で、「17.伴走者といっしょに走っている」や「24.車いすバスケットボール」の態度・行動での有意差は考慮して論議すべき項目となる。

その上で、体験グループが非体験グループより高い割合となる項目は「17.伴走者といっしょに走っている」の知識・理解、関心・意欲や「シッティングバレーボール」の知識・理解、関心・意欲 および などであった。

これに対して、非体験グループが体験グループを上回る項目は「15.車いすで走っている」の知識・理解、関心・意欲、「16.義足・義手で走っている」の関心・意欲、「23.視聴覚者水泳」の関心・意欲 などであった。

表 2. パラスポーツ体験にともなう障害者スポーツへの社会的行動変容比較

		1.あり (n = 407)	2.なし (n = 527)	カイ 2 乗値
15	知識・理解	76.4	82.0	4.446*
	関心・意欲	38.8	46.0	4.900*
	態度・行動	4.0	2.7	1.219
16	知識・理解	86.7	87.5	0.131
	関心・意欲	41.1	49.3	6.216*
	態度・行動	1.7	0.4	4.301*
17	知識・理解	46.3	35.9	10.237**
	関心・意欲	32.0	29.2	0.860
	態度・行動	28.2	19.3	10.249**
18	知識・理解	47.2	38.5	7.066**
	関心・意欲	33.3	34.1	0.059
	態度・行動	17.3	12.5	4.345*
	知識・理解	46.3	35.9	10.237**
	関心・意欲	32.0	29.2	0.860
	態度・行動	28.2	19.3	10.249**
	知識・理解	47.2	38.5	7.066**
	関心・意欲	33.3	34.1	0.059
	態度・行動	17.3	12.5	4.345*

19	知識・理解	27.8	26.3	0.278
	関心・意欲	27.6	27.3	0.006
	態度・行動	32.5	30.6	0.390
20	知識・理解	3.5	2.5	0.753
	知識・理解	45.7	40.1	2.933
	関心・意欲	34.2	34.5	0.005
21	知識・理解	37.5	32.2	2.811
	関心・意欲	3.2	3.4	0.034
	知識・理解	51.2	32.4	33.733**
22	関心・意欲	37.9	30.9	5.018*
	関心・意欲	47.5	28.3	36.278**
	態度・行動	36.8	4.2	160.519**
23	知識・理解	56.9	54.1	0.726
	関心・意欲	42.1	39.3	0.746
	関心・意欲	41.5	33.8	5.701*
24	態度・行動	13.9	7.9	8.723**
	知識・理解	53.9	52.4	0.220
	関心・意欲	30.1	38.3	6.748**
25	関心・意欲	15.1	11.2	3.153
	態度・行動	1.2	1.5	0.144
	知識・理解	92.4	93.1	0.186
26	関心・意欲	62.0	59.4	0.620
	関心・意欲	56.0	43.8	13.595**
	態度・行動	45.1	6.8	185.375**
27	知識・理解	84.6	85.9	0.276
	関心・意欲	49.3	52.3	0.856
	関心・意欲	41.2	36.5	2.139
28	態度・行動	5.0	2.7	3.129
	知識・理解	32.7	29.7	0.896
	関心・意欲	29.8	29.4	0.012
29	関心・意欲	22.8	19.2	1.701
	態度・行動	1.3	1.0	0.149
	知識・理解	19.6	18.8	0.096
30	関心・意欲	23.4	25.3	0.444
	関心・意欲	17.6	12.7	4.216*
	態度・行動	0.7	1.0	0.143
31	知識・理解	13.9	13.3	0.074
	関心・意欲	23.7	24.3	0.047
	関心・意欲	13.7	10.2	2.637

	態度・行動	1.2	0.2	3.778
29	知識・理解	21.1	19.7	0.274
	関心・意欲	26.8	27.4	0.043
	関心・意欲	24.6	19.3	3.629
	態度・行動	1.2	1.0	0.131

有意水準：0.05：*、0.01**

さて、障害者スポーツの体験の影響を標準化して比較検討するには、この体験のみに注目すべきではなく、障害者にかかわる個々人のリテラシーを基礎に、性、年齢や学年、障害者にかんする学習水準、家族内の障害者の存在、日常的な運動・スポーツ実施水準をコントロールして影響を特定する分析が必須となる。

たとえば、障害者にかんする学習水準では、小学生と中学生に理解の差が生じる可能性があり、年齢や学年を調整しなければならない。また、家族内の障害者の存在は決定的な要因となり、家族や親戚に障害者がいると回答した児童生徒は 13%に上る。さらに、日常的な運動・スポーツ実施水準も重要な要因となり、その水準が高ければ障害者スポーツに接する機会が増えると推察できる。これらの要因を調整した分析をすすめる段階にある。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0 件)

〔学会発表〕(計 1 件)

海老原修 パラスポーツ体験による障害者対応行動変容の比較、日本体育学会第 69 回大会、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

海老原修 (EBIHARA, Osamu)
横浜国立大学教育学部・教授
研究者番号：50185138

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

研究者番号：

(4)研究協力者

なし